

説教 『罪を自分ものにする』山本 護 牧師
聖書 詩編 51:5~14/ローマの信徒への手紙 7:4~6

キリスト教は「罪、罪、罪」と脅すようなところがある、と某氏は言う。ううむ、そうかもしれんなあ。「罪で追い込み、それから十字架という救いを出す手口」は靈感商法のようにではないか、という某氏の批判。罪とか霊とか、使う言葉は似ていても、違うのだからなあ。それでは、どう違うのか。

端的に言えば、「罪」は人間であることの属性。だからそれが無くなれば解決、というものではない。旧約の詩人は己が罪を自覚し、隠すことなく(詩編 51:3~7)、「わたしの罪は常にわたしの前に置かれています(51:5)」と語った。「わたしの前に置かれている」とは、罪を主体的に受け取って「自分のものにする」という表明。罪は誰にもあるじゃないか、と己が罪を軽くしてしまわない姿勢。また「常に」とは、その時に解決しても再び現れる、と読める。詩人は冷徹に、加減せず、己を省みている。

罪は詩人のごとく、自分のものにしてこそ骨の髄から砕かれうる。「喜び祝う声を聞かせてください。あなたによって砕かれたこの骨が喜び躍るように(51:10)」。預言者の言葉と反響する(ゼキエル 37:4~5)。「わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く(36:26)」。霊が神によって「置かれる」ように、私たちの前に「置かれている罪(詩編 51:5)」も神による創造の産物なのか。

「砕かれた骨が喜び躍る(51:10)」とは不可解。「枯れた骨よ、主の言葉を聞け(ゼキエル 37:4)～見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む、するとお前たちは生き返る(37:5)」。ゆえに「喜び祝い、喜び躍る(詩編 51:10)」のであろう。罪を自分のものにする者は、骨の髄から砕かれる。そして主の霊を受け、真の命を得る。「罪という上げ底」が壊れ、骨で焼成される器一杯に霊が満たされるイメージか。

「神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊を授けてください(51:12)」。創造の主体は常に神である。人間的な努力で身につくような事柄ではない。「新しく確かな霊」を授かるとは、何となく「霊的な気分」に浸ることではなく(51:8)、人間の力では望みえない現実が、この場を開かれていく確かさ。驚くことではない。私たちは日々、そうした創造のただ中にいるのではないか。

「御救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください(51:14)」。骨が打ち砕かれるのだから(51:10)痛みは伴うであろう。だがそれ以上に、罪の支配から解き放たれる「御救いの喜び」なのだ。罪は、自尊心をくすぐり、優越感や劣等感を刺激してたえず人間を支配しようとする。神の掟である律法も、霊が蔑ろにされれば、権威や権力のような世の価値基準に引き下げられる。

「わたしたちは、自分を縛っていた律法に対して死んだ者となり、律法から解放されている。その結果、文字に従う古い生き方ではなく、“霊”に従う新しい生き方で仕えるようになっている(マ 7:6)」。新しい御言葉に古い詩や預言が反響する。詩人や預言者やパウロばかりではない。私たちがまた「キリストの体に結ばれ(7:4)」、霊によってまったき自由へと解き放たれるだろう。偉大な彼らの命も私たちの命も、「死者の中から復活させられた方のものとなり、こうして神に対して実を結ぶようになるため(7:4)」にある。砕かれる私たちはキリストのものとなり、もはや限りある生と死に支配されない。



【おまけのひとこと】

日干し煉瓦のように雨を通さない赤土 罪の作用はこうした恵みの拒絶 スコップでざくざく砕くと
雨はしみ込み 芽が出 根が土をさらに砕く やがて草刈り機をふり回し 恵みと格闘する季節